

みんなの矢作川

生きていくために欠かせない水。私たち矢作川流域の住民は、生活に必要な水、農業用水、工業用水、ほとんどの水を矢作川から得ています。身近すぎて当たり前になっている矢作川。そんな矢作川にスポットをあてて、シリーズでお送りします。

矢作川には昔、「川の道」があったって知ってた？
今回はその歴史を探ってみよう！



シリーズ第13回
矢作川の今と昔
～川の道・百々編～



矢作川流域には、かつて西三河地方と信州を結ぶ「塩の道」がありました。「塩の道」と聞くと馬の背に荷物を積み山道を歩くイメージがありますが、矢作川の中下流域においては川舟による水運が大きな役割を果たしていました。それが「川の道」です。豊田市には上流側の川舟の終着点があり、矢作川では古鼠(扶桑町)・越戸から河口間、巴川では平古(岩倉町)九久平から河口間を船が行き来していました。



ぼくたち「木」を伐採して、筏にして、「川の道」で河口まで運んだんだよ

長野県・岐阜県を含めた矢作川流域で伐採された木材は川まで運び、川を利用して輸送されました。矢作川流域の水運には、川舟による「輸送」と木材などの「流送」の2つの方法がありました。矢作川の流送には、1本ずつ流す大川狩り(「川狩り」「管流し」とも呼ばれる)とそれらを材料に筏組みして流す「筏流し」の2種類がありました。下流の幅の広い筏「平筏」に対して、上流域の川幅が狭い筏のことを「山筏」と呼び、急流を運ぶ方法として発達しました。



大正6年頃の平戸橋の様子(「高橋村是」より)
参考資料: 豊田市郷土資料館 特別展「川をめぐるくらし」
発行: 豊田市教育委員会

百々貯木場は、明治後期には年間2万本もの流送が行われていたんだって！



とっても賑わっていたのね！

筏乗り、臨時の労働者など川の仕事に携わる人がたくさん集まり、宿、店なども賑わっていたんだって。みんな「百善土場のおかげ」って言っていたそうだよ。



制作: 豊田市近代の産業とくらし発見館
※豊田市近代の産業とくらし発見館にて2016年10月30日(日)まで展示しています。

まぼろしの!? 百々貯木場

かつて、古鼠(ふっそ)と百々(どうど)は矢作川流域の木材土場の拠点でした。百々には明治以降、製材工場があり、陸揚げされた丸太が製材され、川舟で河口まで運ばれていました。百々から拳母や名古屋まで馬車輸送するルートもありました。矢作川流域で木材を扱う問屋は古鼠、拳母、九久平、鷺塚、小湊などにありましたが、古鼠の古彦(古井彦惣)と百々の百善(今井善六)の2者が取扱量が多く、双璧でした。

百善は上流の木を買い取って伐採→輸送→製材まで一貫して行う「木材問屋」でした。徐々に取扱量が増えたことにより木材を一定期間保管できる大きな場所が必要となり、大正7年(1918年)に2年がかりで広さ5,000㎡の大規模な貯木場を作りました。しかし、明治～昭和期にかけて明治用水やダム運用開始によって下流の水域が減少筏が進まなくなったり、近代化によりトラック輸送が急速に発展したなどの理由により、昭和初期には江戸時代から続いた流送という林業文化は途絶え、この貯木場はわずか11年程度しか使われませんでした。現在は、「百々貯木場」として市指定文化財として保存されています。

参考資料: 平成24年度版豊田市森づくり白書
協力: 豊田市近代の産業とくらし発見館



現在の百々貯木場

昔は木を切る人、丸太を流す人、筏を組み人、林業に関わる人がたくさんいたんだね。



そうなんだ！
森・川・海が人や仕事でつながっていることがよくわかるよね。

矢作川研究所だよ！

ニュースレター「Rio」の200号を発売しました！

メールマガジン「いいじゃん矢作川！」の配信を始めた★
矢作川研究所のホットな話題、矢作川を身近に感じられる情報をお伝えしていきます。ぜひ登録ください。
登録はQRコードもしくはメールから
メールマガジン希望の旨メールしてください
E-mail yahagi@yahagigawa.jp

1998年5月に発行を開始したニュースレター「Rio」が200号を迎えました。矢作川流域の自然や文化、環境保全活動を皆さまにわかりやすく、楽しくお伝えしようと努力してきました。バックナンバーは全てホームページで閲覧できますので、ぜひご覧ください。



矢作川研究所の詳しい活動は、ニュースレター「Rio(季刊)」やウェブサイトでご紹介しています。Rioは矢作川研究所や市役所情報コーナーなどでお配りしています。ウェブサイトからどうぞ。

矢作川研究所